



河口博次氏(事故当時52歳)
大阪商船三井船神戸支店長
一橋大学卒業アルバムより

紫芳会だより ～輝く先輩達～

=尾巢鷹山に墜落した日航ジャンボ機の乗客= **河口博次(高校4期)のこと**

No.29
2015.2.1.発行

田口義孝氏(高校4期) 寄稿

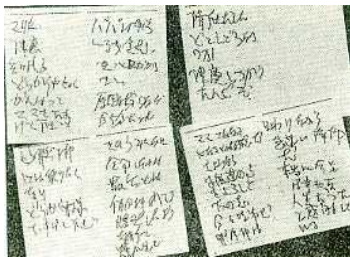
河口が尾巢鷹山で墜死してほぼ30年――

河口博次と私とは1946年(敗戦の次の年)都立第貳中学に入学。彼は東中野、私は荻窪から中央線下りで通学した。当時上り線で行ける学校は殆ど空襲で焼け、又笑止な「学区制」などなかったので、新宿中野杉並3区から相当数が立川に行った。三多摩の連中には「下り鮎」の蔑称を貰った(都立県立中学なる題で大分前に紫芳会報)。河口とは学制改悪による強制的中高一貫で6年、その後一橋も一緒だったので結局10年に亘る学友だった。

河口は坊主頭(当時は皆)の形や年に似ぬ落ち着いた言動物腰から皆に「和尚」と言われていた。同方向であった為か互いの家を訪ねあい、戦争を生きのびたSP(74回転)を「電蓄」(レコードプレーヤー)でかけ、畳の上で寝そべって聴いたり、ダべったりした。一緒に湘南や鎌倉をホツキ歩き、名刹を巡ったりもした。瑞泉寺で二人並んだ写真がどうしても発見出来ないのが心残りである。



田口義孝氏
公益財団法人日独協会理事
NAL名誉会長
日本銀行松江支店長
考査役など歴任の後
協和銀行専務、
あさひ銀総研理事長等



遺体の胸ポケットに入っていた手帳に
7ページにわたって書かれた遺書
羽田空港内の日本航空安全啓発セン
ターに展示

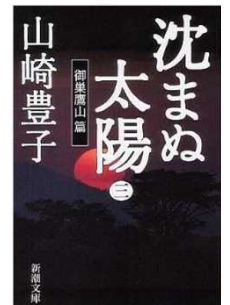
その頃(だったと思う)、三百人の成績が三学期末に職員室の前に貼りだされたものだ。何某三百人中何番と明らかになり末尾の若干名には赤い線がひかれていた。落第の明示である。これは(併設時代も含め)中学の時だったと思うが河口も私も最初は百番前後、進むにつれ大分上にあがったが、優等には遠かったと思う。

不思議なのは十年の間、一度も同じクラスやゼミにはならなかったことだ。交友のサークルも若干ずれて居り長ずるに及び、彼は山とスキー、私は高尾山が精々、寒いのは大嫌いとあって、戸外でも別だった。

後年彼が商船三井、私が日銀の頃暫くしてから立川の級友が経営する銀座の(ハズレの)バーで皆が定期的に来ることになり、良く顔を合わせたが、そのうちに彼は他界し(させられ)た。

彼の揺れた文字でノートに走り書きした遺書(左掲)は涙なくして再読出来ぬ。今迄馬齢を重ねても、これ程のことが言い得るか全く自信がない。老いの涙もろさでは決してない。

マリコ
津慶
知代子
どうか仲良く がんばって
ママをたすけて下さい
パパは本当に残念だ
きっと助かるまい
原因は分らない
今五分たった
もう飛行機には乗りたくない
どうか神様 たすけて下さい
きのうみんなと 食事したのは
最後とは
何か機内で 爆発したような形で
煙が出て 降下した
どこえどうなるのか
津慶しかりた(の)んだぞ
ママ こんな事になるとは残念だ
さようなら
子供達の事をよろしくたのむ
今六時半だ
飛行機は まわりながら
急速に降下中だ
本当に今迄は 幸せな人生だった
と感謝している



山崎豊子作
『沈まぬ太陽(三)
御巢鷹山篇』



2009年映画化

単独機の事故として史上最悪の死者を出した日航ジャンボ機の尾巢鷹山墜落事故は、山崎豊子作『沈まぬ太陽(三) 尾巢鷹山篇』のモデルとなって2001年に出版され、2009年には映画化もされた。